「三田」ゆかりの金心寺

三田の地名の発祥とも言われる弥勒菩薩坐像(みろくぼさつざぞう)が鎮座する金心寺(こんしんじ)は、現在は天神三丁目に所在しています。古代にさかのぼる前身寺院の創建は西暦700年代初め頃とされ、現在の屋敷町、市の歴史資料収蔵センターの周辺に所在したと考えられています。当時の建物の配置は明らかではありませんが、奈良の本薬師寺と共通する文様をもった屋根瓦が出土しています。その後のあゆみを物語る資料は乏しいのですが、鎌倉時代以降には京都の祇園感神院(ぎおんかんじんいん)(現在の八坂神社)の領地(荘園)金心寺荘として資料上に登場します(市史第３巻古代・中世資料の八坂神社文書)。奈良時代の寺号を記した資料は見つかっていませんが、感神院の荘園としての金心寺の名称は十三世紀までさかのぼります。また鎌倉時代の金心寺荘は、感神院ゆかりの巫女(みこ)などの女性に代々受け継がれたことが資料からわかり、興味深い荘園でもあります。

江戸時代の金心寺は、西暦1700年代初め頃と考えられる絵図(市史第４巻近世資料付図１)には侍屋敷に囲まれて「薬師如来山金心寺」とあり、薬師如来信仰の寺院として存続したことがうかがわれます。同寺が丸岡とよばれる現在地に移転したのは、市史第６巻近代資料の16号資料によれば明治２(1869)年２月のことです。江戸で活躍した川本幸民が慶応３(1866)年に金心寺に入り英学塾を開きましたが、おそらくその閉鎖に併せて三田藩の宗教政策との兼ね合いで侍町(屋敷町)から転出したと考えられます。ちなみに16号資料からは移転前の金心寺には弥勒堂・薬師堂と墓地があったこともわかります。

明治34(1901)年には弥勒菩薩坐像が現市域で最初の国宝(現在の重要文化財)に指定されます。国宝の創設は明治30年のことですので、その４年後の指定には三田出身で文化財保護にも尽力した九鬼隆一氏の影響があったのかもしれません。金心寺に伝わる古代以来の法灯に、三田の歴史を重ね合わせることができるようです。

生涯学習支援課 市史編さん担当